



Title	Study on Sustainable Use of Colorant from Plant Resources of Ethnic Minorities in Vietnam
Author(s)	Luu dam, Ngoc Anh
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61441
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (Luu Dam Ngoc Anh)

論文題名

Study on Sustainable Use of Colorant from Plant Resources of Ethnic Minorities in Vietnam

ベトナムにおける少数民族の植物由来染料の持続的利用に関する研究

論文内容の要旨

本論文は、ベトナムのタイ語系の少数民族における植物資源から作られる着色料の持続可能な利用に関する研究である。

ベトナムは、世界的に見ても植物の多様性が高い地域である。12,000種類の有用植物があり、そのうち、4,000種類が薬用植物で、300種類が油を生産するもので、200種類が着色料に用いられている。一方、ベトナムには多くの少数民族が生活しており、それぞれ固有の文化を維持している。少数民族の生活文化は、近代化の中で変化しつつあるが、生活文化や儀礼の中で重要な要素である着色料も変化にさらされているものの一つである。その変化の例を挙げると、第一に、現在、ベトナムの染料の80%は海外から輸入されるようになっていること。第二に、ベトナムにおける食用、衣料用の着色料の文化は非常に多様で豊富であるが、現在、それが忘れ去られようとしている。以上のような、状況から、筆者は、少数民族の天然着色料の利用について、資源そのものと知識の保存のためになにが必要かを考えようとするに至ったのである。

筆者は、2007年以来、自然科学的な視点から、着色料に用いられる植物資源の調査を行い、情報を蓄積してきた。しかし、資源と文化の維持のためには、自然科学的な視点だけでなく社会科学的な視点からの研究が必要だと考え、この研究課題を着想するに至ったのである。

本研究では、筆者が収集を進めてきた生物学的なデータ、環境に関するデータとともに、社会科学的な視点からの調査の結果を組み合わせ、考察を行う。特に、K-A-P法を用いた調査研究を行い、タイ語系少数民族のコミュニティにおける天然着色料の使用状況について分析を行った。

本文の構成は、以下のとおりである。

第一章：序論

第二章：世界とベトナムにおける着色料の歴史概要

第三章：研究方法

第四章：少数民族における食品と衣料向けの天然着色料の使用状況

第五章：黒タイのコミュニティにおける着色料用の変化

第六章：着色料使用の変化における諸要因

第七章：ベトナムの社会における着色料の価値

第八章：議論と結語

以上の研究の結果、着色料の使用の変化には、コミュニティ周辺的环境要因、近代化と人々の意識の変化、市場経済の陥入などが複合的に関係していることが明らかになった。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Luu Dam Ngoc Anh)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	准教授	住村欣範
	副 査	教授	河森正人
	副 査	教授	ズグスタ リチャード

論文審査の結果の要旨

本論文は、ベトナムの山岳少数民族の植物による染色を対象とした現地調査を行い、当該地域の近代化の過程で染色文化がどのように変容しているかを分析し、持続可能な染色植物利用について考察したものである。民族植物学の領域は、生物学と民族学の融合的な知見が必要であり、前者の視点に偏りがちであるが、本論文の研究は、衰退する染色植物利用の持続性を高めたいという動機から、社会科学的な方法を導入して、衰退の原因を考察し、持続のための戦略について考察した意欲的な労作であり、民族植物学の領域でも先駆的な業績といえる。

本論文は、序論を含む全8章から構成されている。第二章では、本研究の背景となる、世界における天然物による染色の変化と、ベトナムにおける現状が記述されている。第三章では、本研究の特色である分野複合的な複数の方法論について、考察がなされている。第四章では、民族植物学者としての豊富なフィールドワークの経験とデータに基づく、ベトナムにおける染色植物の利用状況が詳細に検討されている。第五章では、本研究において新たに実施した、黒タイ族の2つのコミュニティの染色植物利用に関するKAP調査の結果に基づいて、知識、態度、実践の間の相違が分析され、食と衣における染色植物利用の衰退の状況をより詳細に分析している。第六章では、さらに、2つのコミュニティのKAP調査の結果の違いから、天然物による染色文化の変容に対してどのような要因が関連しているかということについて考察がなされている。第七章では、現在のベトナムにおいて天然物による染色がどのような価値を持ちうるのかということについて、科学的な分析も含めた視点から考察されている。最後に、第八章では、以上の章における分析と考察をもとに、ベトナムの山岳少数民族が取りうる持続可能な染色植物利用のための戦略として、エスニック・アイデンティティ、生物学的多様性、そして、天然由来の染色の「安全性」の3つの視点から考察がなされている。特に、「安全性」にかんしては、世界的に「安全性」へのニーズから、食品の着色料の分野で天然物志向（自然志向）が強くなっており、これをベトナムの文脈にも持ち込むことで、植物資源を原料とする少数民族の染色の知識にも、新たな光を当てることができる可能性を論じている。

以上のように、本論文の研究では、民族植物学的な研究において、体系的な研究システムが構築されている生物学的な領域に比べて、不十分な形でしか行われてこなかった社会科学的な研究を深化・発展させ、新たに有効な知見を提供している点で、当該分野の研究の発展に大きく寄与するものである。

以上のことから、本論文について、博士（人間科学）の授与にふさわしい内容を備えていると判断した。